

投書とジェンダーをめぐって：
大学生におけるジェンダー認識について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-02-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 滋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000633

投書とジェンダーをめぐって*

—大学生におけるジェンダー認識について—

熊 谷 滋 子

はじめに

一、投書の性別判断調査

- 1 調査方法
- 2 結果
- 3 判断根拠

二、判断根拠の検討—学生の気付きを中心に—

- 1 連続幼女殺人事件の「犯行声明文」および「告白文」への識者のコメントをめぐって
- 2 投書の性別判断にみるステレオタイプ

三、女性に対する否定的ステレオタイプ

- 1 否定的ステレオタイプへの気付き
- 2 否定的ステレオタイプの成立要因への気付き
- 3 学生たちの今後への模索

おわりに

はじめに

新聞の投書をジェンダーの視点から分析するというと、オヤツと思う人がいるかもしれない。すでに、言語研究においては、投書をジェンダーの視点から分析、検討しているものが少なくない¹⁾。私自身、新聞の記事で、一番興味を持って読んでいるのが、投書である。なぜならば、訓練を受けた記者の言語表現よりも、より個人としての実感を感じ、あるいは、人間としての普遍性を感じる場合が少なくないからである。

今回は、従来の言語研究者という立場で、投書を分析するのではなく、投書という媒体を通して、大学生のジェンダー認識のありようを探ってみたい。投

書の投稿者をふせて読んでみたら、性別がわかるだろうかという、素朴な疑問からの調査を思いついた。したがって、調査方法等も、深く吟味しているわけではなく、その方法等についても、検討の余地のあることは確かである。

今回の調査は、方法もいたって簡単であり、深く吟味することもなく行なったため、どのような結果になるか、全く予想しえなかった。しかしながら、調査を行い、また、その調査結果について、さらに、被調査者とやりとりする中で、それまで気付かなかったジェンダー認識が、投書の性別判断をきっかけに、姿をあらわしてきたことに、驚いた。それまで、授業において、女性問題を含むジェンダーをめぐる問題を考えてきたが、すんなり受け入れてくれる場合は少なく、むしろ、抵抗感を持つ場合が多いという印象を受けた。今回の投書の性別判断では、私がそのような問題を指摘することなく、学生自らが、ジェンダー認識に気付くきっかけとなったのではないかと思う。そして、後述するように、女性に対する否定的なステレオタイプを男性ばかりではなく、女性自身も持っていることにショックを受けた人も少なくない。このことは、今日、価値観が多様化しているとよくいわれているが、はたして、そうなのか。また、価値観を支えているものは、純粹に個人によるものなのか、ということまで考えるようにもなった。今回の判断調査においては、ある共通の価値観が顔をみせ、むしろ、個人というよりも、個人をめぐると社会的、歴史的関係が大きな影響を与えているのではないかということまで、気付くようになった。

ともあれ、これらの一連の作業、経過を経ながら、言語、あるいは文体を、もっぱらの研究対象としてきた、これまでの分析や方法を踏まえて、被調査者自身による自らのジェンダー認識の偏りに対する自覚、反省に役立てていくことも可能となるのではないかと考えている。今回は、学生たちの協力がなければ書けなかった、調査報告書として、読んでもらいたい。

一、投書の性別判断調査

1 調査方法

まえがきで述べたように、投書を通して、そのジェンダー認識がどのようになっているのか、大学生を対象に調査を試みた。

『朝日新聞』1995年10月13日付の5つの投書（資料を参照のこと）について、個人情報（住所、氏名、年令、職業）をふせて提示し、その投稿者の性別

を判断し、その判断根拠も、表現、内容等、できるだけ詳しく指摘してもらった。対象は、大学生1年から4年までの男性120名、女性112名に行なった(実施時期は、1995年10月中旬から下旬である)。ちなみに、投書の見出しと個人情報情報は次の通りである。

- ①「法相辞任劇は政治不信増幅」(男、59才、市議会議員)
- ②「イタリアにも『秋刀魚の味』」(男、31才、フリーライター)
- ③「金融機関自ら厳しい改革を」(男、36才、自営業)
- ④「小学生証明書発行できぬか」(女、34才、主婦)
- ⑤「駆け込み的な核実験許せぬ」(男、34才、会社員)

2 結果

上掲のような性別判断の結果は、表1が示すようなものとなった。

表1 投書の性別判断調査の結果

() は%

回答者 判断した性 投書番号	男性 (120名)		女性 (112名)	
	男 性	女 性	男 性	女 性
①	64(53,3)	52(43,3)	73(65,2)	39(34,8)
②	29(24,2)	89(74,2)	27(24,1)	84(75,0)
③	107(89,2)	10(8,3)	99(88,4)	13(11,6)
④	42(35,0)	77(64,2)	29(25,9)	81(72,3)
⑤	45(37,2)	69(57,5)	38(33,9)	69(61,6)

(無回答は計上されていない)

第一に、回答者による性差、あるいは、学年差は見られず、男女ともに結果がある程度一致しているということである。五つの投書中、②と⑤の2つが、投稿者は男性だったが、女性と判断してしまっている人が男女とも多い。ただし、男性回答者の方に、ゆれがみられ、①④⑤に関して、男性とみなす人、女性とみなす人の割合に、極端な差がみられなかった。一方、女性回答者の方は、

どちらか一方に、片寄る傾向がある。ひとつの考え方としては、男性の方が、一般に、自己の性についてあまり意識しなくても、すまされる社会状況にあるが、女性の方は、どちらかという、自己の性について意識しがちであることに起因するのかもしれない。これまでの研究でも、男性が無標(unmarked)で、女性が有標(marked) (田中和子氏(1993)の「女性冠詞」という指摘もあるように)であり、これが、ジェンダー認識の面にも影響を与えているということが、指摘されてきた。

第二に、当然ながら、表現や内容上、ともに被調査者にとって、「期待される男性像、女性像」にあてはまる場合には、男女ともにあまり、判断がゆれない。たとえば、②について、丁寧体で書かれてあり、料理の話題であるので、女性とする回答者が、70%を越えており、③について、普通体(丁寧体でないという意味)で、政治・経済の話題であるので、男性とする回答者が90%弱もいた。他方、表現と内容が、「期待される男性像、女性像」と外れている場合、判断がゆれていることが分かるが、最終的には、内容で判断している回答者が多い。①について、会話調の構成であり、その点で変わった展開で書かれているが、政治のことなので、男性とし、④について、普通体で書かれているが、子供のことなので、女性とし、⑤については、普通体で書かれ、核実験のことであるが、フランスに関わるものなので、女性と、それぞれ最終的に判断している回答者が多い。しかし、これらのゆれも、先程指摘したように、男性回答者の方に、より見られる。

3 判断根拠

つぎに、学生たちの男女の性別判断の根拠をまとめると、以下のようになる。MFは、男女とも回答者があげた点、Mは、男性回答者のみが、Fは、女性回答者のみが、それぞれあげた点を指す。

○男性であるとする根拠

●表現

MF：文末が断定的。簡潔な文章。漢字が多い。否定文が多い。難しい、堅い言葉を使う

M：外国語的受け身の使用がある

F：熟語が多い。説明的記述がなく、淡々としている(「夫の仕事で、」等の

前書の説明がない)

●文章の展開

MF：論理的。理路整然。起承転結がはっきりしている。単刀直入（感情をストレートに出している）形式ばった文章。反論調

M：感情的でない。女ならもっと感情論的な部分がある

F：客観的。理屈っぽい。攻撃的。強気。相対的な見方。結論をはっきりさせる

●内容

MF：政治・経済や金融、軍事に詳しい世界のことに詳しい。専門的。一介の主婦ではない。正義感

M：男の自負。体裁にこだわる。何かを守るためには多少の犠牲もやむを得ないとする

F：解決策などが具体的で社会に通じている（女の人とは外の世界にでていない）。保守的。苦勞している。フランスのイメージが文化や芸術に向けられている（女なら、服飾か料理）。毎日電車に乗る人（「駆け込み乗車的」）

○女性であるとする根拠

●表現

MF：丁寧体。会話調の文。漢字や熟語が割合少ない。スムーズ。語彙等がわかりやすい。願望でしめくくる。柔らかな口調。控えめな表現

M：リズムがいい。新聞くささがあまりない。文章構成がかわっている

F：受け身的な表現（控えめ）が多い。疑問文が多い。体言止め。自分の血縁をだすのは既婚の女

●文章の展開

MF：感情的。ヒステリック。論理的でない。エッセイ風。自分の意見を押しつけるのではなく、最後まで読者に問いかけながら、終わっている

M：文句をいっている。男に注文をつける。容赦ない。誰の敵にもならず、他人にまかせるやり方

F：結論を出さない。激しい非難ではない。強さが感じられない。井戸端会議のようにごちゃごちゃ言っている。ねちねちしている

●内容

MF：日常的。家庭内（料理、子供）のこと。身近な話題。政治・経済にうとい。専門的ではない。細かい。気が利く。道徳論。人道的。理想論。

フランスへの憧れ、弱い者の立場から、遠慮ない

M：政治批判をしない(男ならもっとマクロ的な考え方をする)。柔軟な考え
方。女にしか分からない事が書いてある

F：理想主義的な厳しさ(男なら、もう少し、企業よりの考え方がしみついで
いる)。非現実的(生活にあまり影響のないものを自信たっぷりに提案
する家庭に閉じこもりがちになる女の人になりがち)。具体性をもたな
い。保守的。人の言葉の意味、ニュアンスなどに細かくて、とてもうる
さい。投書してまで(ヒマな主婦)。海外旅行で食を楽しみとする。優し
い。オバタリアンの

調査後、投書の書き手の性別の事実を明らかにしたところ、全体として、5
つのうち、2つ(あるいはもっと)はずれたことが、学生にとって、ショック
だったようだ。判断根拠に、もっともらしいことをあげていただけに、実際と
違ったということは、自らの男女観を見なおすきっかけになったようだ。なか
には、今回の投書は、とりわけ分かりにくいものを使用したのではないかとの
指摘もあったので、別の新聞(『読売新聞』1995年5月3日付の7つ)を同様な
方法で回答してもらったところ、やはり、あたらないのが全体で2つほどあっ
た。(ここでは、詳細は省略する)その中で、1回目の調査であたらなかったの
で、自分の判断基準が違っていたことを反省し、2回目には判断基準を変えて
やってみたが、やはり、あたらなかったという人もいた。

今回の調査が興味深く示してくれていることは、投稿者の性別が意外にあた
らなかったという事実よりも、それ以上にその判断根拠にみられる、女性像、あ
るいは男性像に対する学生たちに抱かれているイメージというか、観念が、浮
き彫りにされたということと、それへの彼らの反応である。

二、判断根拠の検討—学生の気づきを中心に—

1 連続幼女殺人事件の「犯行声明文」および「告白文」への識者のコメン トをめぐって

大学生の判断根拠をめぐり、さらなる検討に入る前に、文体と性差の関係に
ついて、興味深い議論を紹介しておきたい。それは、武田春子氏(1990)がま
とめた識者のコメントである。武田氏(同掲書・29頁)は、1988年に起きた、

周知の連続幼女殺人事件において、「今田勇子」という名で出された「犯行声明文」および「告白文」についての、いわゆる識者のコメントに「根強い性差別観念がある」ことを指摘している。

犯人が男性か女性か分からない時点で出された識者のコメントが、犯人が分かった時点で読みなおすと、武田氏の言うように、(全員ではないが)性差に対する共通のイメージなり、認識が、識者にみえかくれしているのがわかる。そこでの識者とは、推理作家、精神科医、臨床心理学者、犯罪社会学者、国語学者、言語心理学者等、犯罪問題や言語に関わりのある職業についている、いわば、その領域でのプロを指している。以下に、武田氏(同掲書・30頁)の識者のコメントのまとめを示しておこう。

★「男らしさ」

論理的。理路整然。「つまり」「さて、真実の証明に入ります」 自分のドラマにのめりこんでいない。非情緒的。硬い表現。女が使わない表現「～かなる」「物証」「警察発表」「捜査状況」「証の一つを立てましょう」「さて、真実の証明に入ります」「近い筈だとにらみ」「つけ回す」「犯行声明」「事実であります」「不注意かなる」「現世の刑法」「この世の臭いとは思えないほどの悪臭」。挑戦的。悪ふざけ。「今田勇子」。ゲーム感覚

★「女らしさ」

情緒的。陰湿。文章全体が長い。ネチネチ。子のない女の心情がよく書けている。男にはわからない心理を描写。丁寧。「悟っていらした」「ですの」でお願いします」「あげたい」「～かしら」。女らしい語彙「おばさんも」「高齢」「切開」。文章全体がやわらかい

上述のように、武田氏がまとめた識者のジェンダーに対する認識と、今回の大学生を対象にした調査の性別判断根拠とが酷似していることに気付くのである。社会経験、専門的知識の乏しいとされる学生と、その道のプロである識者に、それほど大差ないイメージをもっているということに驚きを感じ、さらには、そのイメージの源はなにかということも、考えるようになってきた。

ここで、識者の認識と、今回の調査で示されていた判断根拠を、学生に提示し、それについての意見を求めたところ、ほぼ、以下のものであった。

第一に、たとえば、「子供が産めない、、」という記述に注目し、「そこから女

性だと判断する識者は、むしろ、子供を産んだことのない男性が多いのではないか」という意見である。というのは、「子供が産めない女性は、むしろ、そんなことはしないだろう」と思われるからである。したがって、識者といっても、ジェンダー認識は、主観にすぎないものであるということが分かる。第二に、識者であるがゆえに、「自分の専門にせまく固執してしまっているのではないか」という意見である。つまり、「専門自体の世界での性差認識が男女の現実像とかけ離れ、ステレオタイプ化しているのではないか」という指摘である。

ついでに言えば、性別判断をめぐるこの事件への識者のコメントにとどまらず、他の問題、事件等に対する識者のコメントに対しても、「識者の意見を鵜呑みにしないように心がけるべきだ」との意見も出され、教師という立場にある者として、私自身、大いに反省させられる機会ともなった。

2 投書の性別判断にみるステレオタイプ

つぎに、今回の調査における判断根拠をもとに、今日の学生たちの抱いている男性像、女性像を、大まかに描いてみると、男性は、そして「男らしさ」は、忙しいサラリーマン、女性は、そして「女らしさ」は、ヒマな専業主婦とでもなるうか。それぞれ、①、②と二つの側面から見るができる。

男性のステレオタイプは、①毎日、家族のために、一生懸命働き、とても忙しい。厳しい社会の中で、苦勞しており、さらに、新聞も読み、専門的知識もあり、政治・経済等をマクロ的視点から考えている。女性のように、厳しい一面的な理想論には走らず、会社側の立場も考慮しつつ（そのため保守的にもみえる）、あくまで現実的で具体的な提案を論理的、客観的に述べている。②しかし、強気で攻撃的で、型にはまった言い方をし、体裁にこだわり、感情がみえてこない。一般論に頼らなければ、自分の意見を前面に押し出せない。

一方、女性のステレオタイプは、①毎日、主婦として、家庭の中で、家事(料理等)や育児に専念している。優しく、きめ細かく、よく気が利いて、しかも、自慢せず、控えめである。(会社に勤めている会社員(男性)よりも進んだ考えをもつこともあり)柔軟で、丁寧で、わかりやすく、面白く、リズムのある書き方をする。②しかし、家庭に閉じこもりがちなので、視野がせまく、新聞も読まず(朝のワイドショーにうつつをぬかし)、社会や政治からずれている。一方で、ヒマがあるので、オバタリアン的に、生活にあまり影響のないものを自信たっぷりに提案してみるが、非現実的であったり、誰にでも考えられるよう

なもので、独創性もなく、一介の主婦にすぎない。感情的、ヒステリックな物言い、結論がない。

①が、学生によって描かれている肯定的ステレオタイプ、つまり、「望ましい男性像、女性像」と思われるものである。②が、ともに、否定的ステレオタイプである。さらに、後述するが、特に女性に対する②が男性に比べると、かなり、厳しく、また、多くあげられていた。これらのステレオタイプは、男女ともに、かなり共通にあるものだとすることに気付き、学生自身驚いている。「皆、同じようなイメージを持っているということは、少々恐い気がする」という学生の感想が、このことを物語っている⁽²⁾

被調査者である学生自身は、サラリーマンや主婦としての経験がないので、彼らのサラリーマンや主婦に対するイメージは、マスメディア等より、四六時中、流されてきた、また、流されている情報はもちろんのこと、直接的には、学生の親の世代の生きざまを空気のように感じながら、生きていることから、つまり、それらの諸状況の中から、作られてきたものであろう。つまり、学生の「男性像、女性像」は、彼らが生まれ、育ってきた 1970 年代頃の、高度経済成長の過程で、社会的につくられてきた、親世代の男女の生活のあり方をみることによって、形成されてきたのではないかということである。また、竹中恵美子氏 (1995・112 頁) の指摘しているように、家事の軽減化が展開されていく時代を表象におけば、「三食昼寝付き」という代名詞の専業主婦のイメージは、いい意味でも悪い意味でも、この頃、特に強くあったのではないだろうか。

しかし、周知のように、その時代に比較し、今や、労働力の女性化の進展が急速にみられ、女性イコール専業主婦といった図式が現実崩れつつある状況を迎えているにもかかわらず、学生の「女性像」は、上述の通りである⁽³⁾

一方において、大人の女性の典型を「専業主婦」としてしまうのは、まったく根拠のないことでもない。様々なところで指摘されているように、「主婦」という表現、あるいは、立場に疑問をもちながらも、主婦という役割が、個人の生き方に深く入りこみ、「主人」をたてて、家族のために存在していくことに、心を注いでしまう状況がある。それが、投書の文体、内容へも大きく影響を与えている場合が少なくない⁽⁴⁾

ともあれ、社会背景の変化とはいっても、つまり、女性が収入に結びつく仕事に積極的に参加する機会が増え、女性の経済的自立も可能となりつつあるといっても、男女の関係のそれまでの認識を直ちに变えていくことにはならないし、また、そこに難しさがあるということだ。つまり、現実是新幹線並みに、

認識は各駅停車並みに動いているということになるのだろうか。

三、女性に対する否定的ステレオタイプ

1 否定的ステレオタイプへの学生の気付き

今回の性別判断の取り組みを通して、男女に対する学生の認識が、どのようなものであるか次第に分かってきたが、さらに、指摘しなければならないものに、女性に対する意外なほどの否定的見解である。これは、女子学生自身も抱えている、または、抱かされてきた、否定的ステレオタイプである⁽⁵⁾

以下、この点をめぐる女子学生たちの感想をいくつか紹介しておきたい。

「感情表現的文体を女の文と判断している今の私の判断基準そのものに、今あらたな発見と驚きを経験している。」

「漢字が多いから男性であるなどと判断されると、『女は知性に欠ける』といわれているようで、女の私はイヤになる。しかも、このような考えを男性だけでなく、同性である女性自身の多くが持っていることも事実なので、悲しくなってしまう。」

「女性は、男性に対して、劣等感があるから、マイナスイメージを根拠とする回答が多くみられたのではないか。」

「問題なのは、女性自身が、女性に対して、女性は、日常的で視野の範囲も限定されたものであるというような認識をもっているところ。これは、女の社会的地位を低められかねないような認識である。」

学生の気付きに共通に示されているその声は、女性自身も、女性のことを否定的にみてしまっていることの発見である。20才前後の、女子学生の今後の生き方が、(つくられた)否定的な専業主婦像としてしか思い浮んでこないという事実は、やはり、悲しいことではあるまいか。

2 女性に対する否定的ステレオタイプの成立要因への気付き

前章でみたような否定的ステレオタイプが、特に女性に向け集中しているというこの認識は、いかに、形成されてきたものか、学生たちと話し合う中で

てきた意見のいくつかを紹介しておきたい。

「政治に関心があり、詳しいのは男という。・・・(中略)・・・この思い込みは、歴史的産物に他ならないのではないか。」

『男語』『女語』は、男は仕事、女は家庭という、かつての社会的状況や立場を反映してできてきた文法ではないか。」

『女のくせに』という言葉は、『男のくせに』という言葉より、使用頻度が高い。『女がこうあるべき』という言い方は、男のそれより、質、量ともに、そして重く、女を圧迫してきた。」

「小学校の先生が、『女の子は「です・ます」体の方がいいし、男の子は男の子らしく、「である」体がいい』と言っていたのを思い出す。これは、おかしいと、今思う。」

「話し言葉について、会話文の主語や語尾に、男女差がみられるが、それらは男性の作家が(明治時代以来)、女性に女らしい「美しい日本語」とされるものを押しつけたからではないか。そして、それも、今や崩れつつあるのではないか。書き言葉の方も。」

「生まれてきてから、男は男らしく、女は女らしくと、周囲から与えられてきたものであり、容易に取りのぞくことは難しいものである。」

最初の調査から、その後の取り組みの中で、学生たちの意見を聞いていると、言語は記号、コミュニケーションの手段であるだけでなく、男女の社会的、歴史的関係と深く結びついていくことへの、彼らの気付き・認識となっていくのに気が付くのである。それにしても、女性のおかれている社会的現実は変わりつつあるのに、陰に陽に、認識は「女らしく」「男らしく」と慣習的に、また制度的に形成されてきているため、それを人間らしい関係に変えていくことは、決して容易なことではない。

3 学生たちの今後への模索

投書の性別判断の調査にはじまり、「識者のコメント」の検討、自分たちの意識のあり方を反省しあうなかで、学生たちは、言語とジェンダーとの関わりについて、僅かながらでも考え直す契機をつかんできたのではないかと考えているが、今後への模索を感じさせる学生たちの意見をいくつか紹介したい。

「偏見、先入観、固定観念にしばられていることに気付いた以上、なんとかしたい。」

「ステレオタイプを即あてはめて人を見る、先入観だけで人を判断するのは、真実から遠ざかる危険なことだとわかった。」

「文体上の女らしさ、男らしさの境目がなくなってきて、混在化の進行中にあるのではないか。」

「ステレオタイプは幻想にすぎず、文体等は、結局、筆者の姿勢、性格の反映である。」

「男女平等とか、みんないつも言っているわりには、みんな、男は威張っている、女は控えめであるというイメージを持っているようだ。このような状態では、真の男女平等は実現できない。」

今回のことを通して、最初は、投書の性別判断を嬉々として、もっともらしく、詳細に述べてくれた学生が、この一連の取り組みの終わる頃には、文体、内容から、性別を判断することは難しいと言い、あるいは、「男らしさ」「女らしさ」が、いかに作られてきたものかを、自らの主題として取り組む者もでてきた。私自身も、ジェンダー認識のありようをめぐる、学生に教えられたことが多くあった。自分に内面化された認識に気付くことは、それがあまりにも自然に形成され、無意識のレベルにまでも入りこんできているだけに、困難なことであるし、また自分の認識がなにかによって、あるいは誰かによって、作られている（マインドコントロールされている）ということに気付くのも嫌なものである。しかし、一度、気付く、反省し、自覚するようになれば、今後の生き方を模索する上で、なんらかの支えになることがあるかもしれないと、学生にも、自分自身にも期待したい。

最後に、くどいようだが、あらためて、学生の言葉を引用したい。

「よく言われる新聞に書かれているような難解であるとされる文章を男語だとするのは、『男の子は青、女の子は赤』といったイメージ的なものにすぎないのではないか。女性でもそのような文章を立派に書くことができる。ただ、それを生意気だ、無理だととらえる人がいる限り、男語・女語というのは存在するかもしれない。新聞に載った投書を今あらためて読んでみると、使われている言葉や文章に性別をあからさまに感じることはなかった。意見は、性別を超

越した、『人間』の意見として感じるし、またその方が好ましいのでは。」

おわりに

今回の投書の性別判断をはじめとする、一連の取り組みについては、次のようにまとめられる。

これまで多くの研究で指摘されてきたことであるが、言語は、単なる記号ではなく、人間をめぐる社会関係の反映であり、男女関係について言えば、男女の歴史的、社会的関係を如実に物語っているものである。さらには、その社会関係を再生産していく役割も果たしているのではないかということである。この課題の考察のため、投書を通しての、ジェンダー認識の調査は、それまで、ジェンダーについての思い、感じを、意識化し、気付く作業として、役に立つのではないかと思う。

少し大げさになるが、投書の性別判断の今回の取り組みは、また、言語研究の一つあり方としても、有効ではないかと思う。たとえば、これまでの投書の分析の場合、投稿者の性別を知った上で考察し、性差がある（注1であげた研究）、あるいはない（寿岳章子氏（1966）等）という結論づけがなされてきた。今回は、被調査者に性別をあててもらおうという、逆のアプローチをとることによって、投稿者の性別判断にとどまることなく、とりわけ、被調査者となって協力してくれた学生たち自身が、自らの判断根拠の限界性に気付き、投書の世界を越えて、広く言語とジェンダー、あるいは、現代社会との関わりにまで関心を深めてくれるようになったことである。考えてみると、このような逆のアプローチは、桑原武夫氏（1976）における、周知の「第二芸術」論展開のきっかけとなった方法に似て、興味深いものである。

*この論文の作成にあたっては、統計について諸井克英氏に貴重なご意見をいただいた。さらに、ジェンダー認識に対するの考え方についても、いろいろな方に鋭い指摘を受けた。心から、感謝したい。

注

1. 投書と性差に関するこれまでの研究として、国緒英子氏（1987）、中西清美氏（1992）、佐竹久仁子氏（1995）らがいる。これらの分析で一致していることは、文体に性差が、あるいはその傾向があるということである。詳しくは、これらの論文を参照されたい。

2. 牧野成一氏(1979:211~12)によれば、アメリカ人よりも、日本人の方が、文体の性別判断においてステレオタイプ(女は論理的でない、直観的等)により強くとらわれていると指摘している。

3. 1984年に、兼業主婦が、専業主婦を上回ったことでもわかる。「専業」という表現が、仕事をもたない主婦という立場の人が少なくなったということをおもわしている。

4. 主婦は、夫を指す「主人」という語彙に違和感を抱きながらも、主婦としての立場が周囲から期待されている場面では、不本意ながら、「主人」を使用しなければならないということは、よく指摘されている。人間として存在するというよりも、「主婦」として存在する、しなければならない状況に立たされる場合には、より強く「女らしさ」が求められ、知らず知らずのうちに、「主婦」としての役割を見事に演じてしまうことがある。これは、言語問題でいえば、「女らしい」といわれる「丁寧体」等の表現を通して、自分の立場を表現し、「女性の言葉」を結果的に再生産してしまうことになる。詳細は、熊谷(1996)を参照されたい。

5. 「女らしいことばづかい」の歴史的考察は、遠藤織枝氏(1994)にまとめられているので、参照されたい。

引用文献:

- 遠藤織枝(1994) 「若い女性のことば—論評で綴るその昭和史」『日本語学』13号、10月号、pp.19~32. 明治書院
- 日尾康子(1996) 「性差と発話行為にみられる力関係—発話の量と内容からの考察—」『四国学院大学論集』第90号、pp.85-98.
- 寿岳章子(1966) 『レトリック—日本人の表現—』共文社.
- 寿岳章子(1979) 『日本語と女』、岩波新書.
- ことばと女を考える会(編)(1985)『国語辞典にみる女性差別』 三一書房.
- 国緒英子(1987) 「投書のパターンと表現」『言語生活』431号、10月号、pp.10~46、筑摩書房.
- 熊谷滋子(1996) 「女の文体の移り変わり—過去40年間の新聞投書をめぐって—」『人文論集』静岡大学人文学部 第47号の1 pp.263-75.
- 桑原武夫(1976) 『第二芸術』講談社学術文庫.
- Lakoff, Robin (1975) *Language and Woman's Place*, New York: Harper Torch Books. かつえ・秋葉・れいのるず訳(1993)『言語と性 英語にお

ける女性の地位』有信堂

牧野成一(1979) *Sexual Differences in Written Discourses. Papers in Japanese Linguistics*. vol. 6. pp. 195~217.

McConnell-Ginet, Sally Borker and Nelly Furman eds.(1980) *Women and Language in Literature and Society*. London: Praeger.

別府恵子編訳(1989) 『文学と社会における女性と言語』、弓書房。

中村桃子(1995) 『ことばとフェミニズム』勁草書房。

中西清美(1992) 「日本語と性差」『女性学年報』第13号、十月号、pp. 91~103、日本女性学研究会

O'Barr, William M. and Bowman K. Atkins (1980) *Women's Language or Powerless Language? Women and Language in Literature and Society*. London: Praeger, 93-110

えいのるず・秋葉かつえ編 (1993) 『おんなと日本語』、有信堂。

佐竹久仁子(1995) 「女の文体・男の文体」『ことば』16号、pp. 52~68、現代日本語研究会。

竹中恵美子(1995) 『女性論のフロンティア—平等から衡平へ』 有斐閣。

竹中恵美子、久場嬉子編(1994) 『労働力の女性化』、有斐閣。

武田春子(1990) 「言語性差のステレオタイプ」『女性学年報』第11号、11月号、pp. 28~39、日本女性学研究会。

田中和子(1993) 「新聞にみる構造化された性差別表現」『おんなと日本語』、pp. 98~122、有信堂、

Thorne, Barrie and Cheris Kramarae and Nancy Henley eds.(1983) *Language, Gender and Society*, Rowley, Mass: Newbury House.

資料 『朝日新聞』1995年10月13日の投書 ○は段落の始まりを示す

①○こんなに私たち国民をバカにした話はない。今回の法相辞任劇だ。田沢法務大臣が二億円借り入れ裏取引疑惑にからんで辞任した。十日朝のテレビニュースのなかで、彼は記者インタビューでこう言っていた。○記者 裏取引の事実はあったのか 田沢氏 ない 記者 ないのなら、なぜ辞めるのか 田沢氏 国民が待っている補正予算を通してあげるためだ○「通してあげるため」とは何ごとだ。いやしくも一国の大臣が何も悪いことをしていない(と本人は言っている、、、、)のに、途中で突然職務を放り出すことこそ、国民にとって迷惑な話。むしろ、疑惑を晴らした(本当にそうなら、、、)うえで職務に精出すの

が政治家の道ではないか。○すべての政治家がそうだとは言わない。が、自分の言動や理念を明らかにしないまま、利得や肩書に目を奪われ、行動する政治家が多すぎるのではないか。それが国民の政治不信を増幅させているように思えてならない。○それとそんな政治家が平然をしていられる背景は、「国民のため」だの、「地域のため」だのの大義名分に簡単に丸め込まれてしまう風潮が社会一般にある——ということに、肝心の主権者である私たち国民が気付くこと、目を向けること、それがいま一番大事なことだと思うのだが、、、。

②○七日の本紙「天声人語」欄に「秋刀魚（さんま）を食べるのは日本ほか、韓国、台湾、ロシア、フィリピン程度で、、、」とあったのを読み、ひとこと。○南イタリアには、秋刀魚を使ったおいしい料理があります。秋刀魚に、ナチュラルチーズ、パン粉、ニンニク、香草などのころもをつけ、塩とオリーブ油をかけて、オーブンで焼いて食べる料理を「ペッシェ アズーロ アッモッリカート」として紹介した本も出版されています。○ほかにもイタリアには、日本人が「欧米人には食べられない」と思い込んでいる食材がたくさんあります。シチリア島の町の市場に行くと、タコを“丸ゆで”にしたものが店先に並べられ、お客は切り分けたものを、ファストフードのように、立ち食いでもバクついていきます。北部地方などでは、ウナギ料理もよく食べます。○「欧米人は刺し身が食えない」とも言われますが、「イワシのマリネ」のような、火を通さない魚料理を食べるイタリア人には、刺し身に対する抵抗をあまり感じない人も多いのです。また、北イタリアには、ソバ粉を混ぜたパスタまであります。○明治期に英国、戦後は米国を中心に西洋文化を学んだ日本人は「欧米風の食事」というものを少し偏って考えているように思われます。「秋刀魚の味」を知るイタリア人もまた、ヨーロッパ人なのです。

③○大和銀行が先の巨額損失事件に関する情報開示をせぬまま、多額の資金を調達したことが国際的な問題になっている。信用第一の金融業界で相手をだましたような行為は、信義に背いたルール違反であり、非難も当然だ。○それにしても、最近の金融機関の体たらくぶりは本当にひどい。変額保険や不良債権、そして住専などの諸問題は、どれもた利益優先主義による強欲な姿勢から生まれたものばかりで、「世のため人のため」という思想はみじんも感じられない。○そんなズサンな経営をしてきた金融機関に「信用秩序維持」という大義名分のもと、公的資金を導入するかどうかの議論がある。欲の皮が突っ張って、倒

れそんな企業を国民の血税で救うことには大きな矛盾を感じるが、信用不安回避のためには仕方ないのかもしれない。○でも、公的資金を導入するなら、その前に資金の売却や、突出した行員の高賃金体系を改めるなど、金融機関はすべきことがあろう。資金の投入だけでは経営は改善されても、不良化した経営マインドやモラルは直るまい。それを正すためにも金融機関は、経営失敗の責任を明確にして反省し、自ら厳しい改革を断行すべきだ。

④○最近の小学生の体格の良さには驚きさえ覚える。我が家の周りにも、どう見ても高校生としか思えない子がたくさんいる。辛うじてランドセルで見分けがつくほどだ。○実際、小六の私の姪（めい）も、身長は一五五センチ、体重は四五キロほどあり、話せばその幼さですぐ小学生だと分かるが、黙っていたら、高校生、いやOLに間違えられない勢いである。○まあ、小さいよりは、大きいほうが良いかな、と思っていたのですが、実はこれがくせ者らしい。遊園地や動物園、その他入場料の必要な場所では、たいいてい入り口で呼び止められ、確認されるそう。小学生だと言っても疑わしい目つきで見られるとか。○どこに行ってもそんなふうなので、とうとう姪は「あーあ、早く中学生になりたいなあ、そうしたら小学生って言われなくっていいもん」と発した。気の毒な限りだ。○そこで提案だが、ぜひ小学生証明カードの発行をお願いしたい。連絡先は学校、そして顔写真と発行年度という簡単なもので良いと思う。必要と感じた親が学校に請求するというのはどうだろう。

⑤○正直、今回のフランスの核実験には大いに失望させられた。○これまで私は、フランスに対して、文化や芸術の中心というイメージから少なからず好感を持っていたが、幻想に過ぎなかったことを痛感させられた。○まず、かつての植民地で実験を行うという卑劣さが許せない。彼らが、かつての植民地の住民を自分たちと同じ血が流れている人間として見るができないのは、前近代的な植民地主義的優越意識をいまだに捨て切れていない証拠だ。○この事実からだけでも、フランスを文化国家と言うことはためらわれる。○だからといって、国内で行った中国がましというわけではない。○両国に共通するのは、禁止になる前に、駆け込み乗車的にやってしまおうという無責任な発想だ。○こうした動きを一つ認めれば、なし崩し的に核を持ちたがっている無責任国家の駆け込み乗車的核実験を誘発し、せっかく動きだした軍縮という世界的な流れを逆流させることにもなりかねない。○どうか両国が真の文化国への道に戻っ

てくれることを心から願ってやまない。